

岐阜県

清流の国ぎふ森林・環境税

緑豊かな
清流の国ぎふづくり



清流の国ぎふ森林・環境税活用事業について～

未来へつなぐ 「清流の国ぎふ」づくり

[座談会]

岐阜県知事

古田 肇

岐阜県立森林文化アカデミー学長

涌井史郎

オークヴィレッジ(株)代表

稲本 正

「岐阜は木の国、山の国」そして、「清流の国」。
第30回全国豊かな海づくり大会(平成22年)を契機とした、
森・川・海のつながりの中での環境保全意識の高まりが、
清流を「守る」「活(い)かす」「伝える」さまざまな取り組みに広がり、
現在「清流の国ぎふ」づくりに発展している。
平成24年度から導入された「清流の国ぎふ森林・環境税」もその一つ。
そこで「清流の国ぎふ」づくりをテーマに、それぞれの思いを語った。



「清流の国ぎふ」づくりについて意見を交わす(右から)稲本正オークヴィレッジ代表、
涌井史郎県立森林文化アカデミー学長、古田肇知事

※本企画は、岐阜新聞朝刊で2013年7月28日に掲載されたものです。

上・下流域の絆深く

流域連携、次世代に潤い



岐阜県知事
古田肇氏 ふるた はじめ

岐阜市出身。1971年通商産業省（現経済産業省）入省。羽田、村山内閣首相秘書官、外務省経済協力局長などを経て、2005年に県知事に就任し、現在3期目。

—— 涌井さんは、以前から「清流の国ぎふ」づくりに深く関わられ、今年4月に県立森林文化アカデミー学長に就任された。就任されてからこれまでの「ご感想は」。

涌井 アカデミーでは、森と木に関するスペシャリストを実学ベースで教育しており、本当に感動している。技能、実学レベルで問題を探つてから科学があり、その間を技術がつなぐという教育の在り方がとても良い。「清流の国ぎふ」づくりに向けた取り組みは、行政区界で捉えず、知事が言われるように一つの大きな「流域界」としての運動を展開する

—— 稲本さんは、森を再生する活動を長年続けておられるが、活動の拠点を岐阜を選ばれた理由と、森の再生活動の近況は。

稲本 私は日本人としては世界の森を最も多く回った人間だと思う。アマゾンには確かにすごい森があり水もあるが、川の表面

が鏡のように平らであり、川の落差が小さい。一方、明治時代に来日したオランダ人の土木学者が、日本の川を見て「これは滝だ」と言ったそうだが、中でも岐阜県の川は流量×落差が日本一。さらに言えば、日本は世界で一番美しい水がある国。つまり岐阜県は世界一水がきれいな所といえる。きれいな水は森と川の健康状態が決まる。森は木を植え、間伐も必要。山をきれいにすれば保水力が上がる。NPO法人ドングリリの会では、ナラ、クスギ、ホオ、カツラ、トチなど広葉樹の苗を育てて各地に送っている。

—— 「清流の国ぎふ」づくりに、上下流域の連携が欠かせないが、県の取り組みは。

知事 短期間に「清流」をテーマにした▽全国植樹祭▽全国豊かな海づくり大会▽ぎふ清流国体・ぎふ清流大会を行った。特に海づくり大会では、山・森・川そして海のつながりの中で私たちは生かされている、というメッセージを発信した。この呼びかけは、具体的な活動になって少しずつ広がっている。例えば、下流の伊勢湾の、流木を含む漂着物問題に対応して、愛知県・三重県の人たちと上流の郡上地方に集まって森林の除伐作業を行った。また揖斐川流域の清掃活動は、今年も六つの市町・11カ所に3千人が参加するほどに広がった。清流を守り、森をつくる実践を通して上流、下流域が絆を深めている。

—— 森林文化アカデミーにおける人材育成のポイントは。

涌井 やはり現地、現物主義。日本は大変長い列島だが北だから寒い、南だから暑いという構図ではない。世界でも稀な多様な

人の内側の環境も



岐阜県立森林文化アカデミー学長

涌井史郎氏 わくいしろう

神奈川県出身。2003年に日本国際博覧会(愛・地球博)会場演出総合プロデューサー、2011年に国連生物多様性の10年日本委員会委員長代理を歴任。現在、岐阜県立森林文化アカデミー学長、東京都市大学教授、東京農業大学客員教授に就任。

国土特性がある。それぞれの現場で応用しながら実学を展開しないと地域に根付いていかない。アカデミーには、森や木に関心がある人を応援する生涯学習講座、林業者の短期育成プログラム、森林管理のプロを育成するエンジニア科とクリエーター科がある。また、国際交流も進め、森が健康でエコノミーとエコロジーが共存できるシステムをつくる課題にも取り組む。

知事 国際交流といえば、ドイツのバーデン・ヴュルテンベルク州の視察団が来岐したときに、「岐阜は清流の国だ」と申し上げたら、「われわれは清流の州だ」と言われ、意気投合した。今後、アカデミーとこの州にあるロッテンブルク大学で森づくりや「清流」をテーマにした交流を始める。

稲本 この州には、世界の環境都市といわれるフライブルクという街がある。城壁のある街で、城壁内には自動車を入れない。サッカー場は太陽光発電で電力を賄い、昼に発電してナイターができる。

知事 この街はドナウ川とライン川、支流のネッカー川と、川に恵まれた所。

稲本 しかし、清流では絶対、岐阜県の方が勝つ。

涌井 「清らかさ」という面では、岐阜県の川はけた違いだ。ところで、日本の国土は、大宝律令(701年)ができたときに令制国、今の県のようなものが成立し、64の国と二つの島が決められた。この基準は流域だった。当時、流域こそが人々の暮らしを支える生態学的ユニットだということ

が分かっていった。だから、つのが大きな流域界で捉える知事の考えはすばらしい。その意味で岐阜は個性的かつ日本に貢献できる。なぜなら岐阜がしっかりとしなかつたら富山湾も伊勢湾もだめになるから。

——将来の担い手である子どもたちが、木の魅力に触れることはとても大切と思うが。

稲本 自然や森に何か月も触れない子どもはイライラしやすい。最近の調査では、疲労を感じる幼稚園児が多くなっていることが分かった。治すには森の力を借りること。木に触れることが五感を良く働かせる。疲労は

岐阜の清流は世界一



オークヴィレッジ(株)代表
稲本正氏 いなもと ただし

富山県出身。1974年に飛騨高山でオークヴィレッジを創設。81年に生態系の回復と環境教育の実践を目指しNPO法人ドングリの会を発足。現在、岐阜県教育委員会教育委員、東京農業大学客員教授などに就任。

森林の中で自由に遊べるようにしている。また、一方でこの地域の古城山一帯は多様な植物に恵まれ、驚くことに日本を支える価値のある森林資源もある。それはエゴノキ。これがないと和傘ができない。ろくろ(傘骨をつなぐ歯車のような部品)の材はエゴノキでなければだめ。供給できるのは岐阜県だけ。一方でろくろを作る職人も1人という。鶺鴒(ぎよ)を編む人、和紙をすくための「すだれ」を作る人も少ない。岐阜県には隠れた森林資源と、匠といわれる職人がたくさんいた。それを川を通じた物流網が支えた。この独特の価値を県民の皆さんに知ってほしい。

の町屋建築である吉島家住宅を見て「地球を半周しても見に来た甲斐があった」と言った。名言だ。飛騨の匠は世界で評価されている。県民の皆さんにも、いま一度評価し直していただきたいと思っている。

——最後に、今後の「清流の国ぎふ」づくりについて。
 涌井 人類は、他の生物のご厄介になっている。日本人は生態系から受けるサービスが分かっているから、独特な自然信仰が生まれた。そして、人が、神、自然の許しを得ながら、適度に手を入れることが最も望ましいと気づいた。これが里山。里山は元本に手を付けないで、利息で暮らす仕組みだ。

持続的な未来、われわれの世代だけでなく次の世代も潤う、そういう県土づくりが大切。「清流の国ぎふ」というのも、川や沢の流れを大事にしていっただけではなくて、脈々と命を未来につないでいける、その象徴を「清流」という言葉に込めた、と私は考えている。岐阜県は、自然との循環・共生型社会をつくるモデルとして、非常に適していると思う。

稲本 私が委員を務めている県教育委員会では「清流の国ぎふ」の精神を「清流スピリット」と言っている。これを具体化するため、にモデル的な学校をつくりたい。アカデミーもその一つ、作家のC・Wニコルさんと私がつくった森の学校(宮城県東松島市)も一つ。



美濃市曾代 県立森林文化アカデミーにて

それに類するものを県内の中学、高校でやりたい。

知事 お二人のお話を通じて「清流の国ぎふ」づくりが、自然環境、ものづくり、教育、心などあらゆるところにつながっていることを再認識した。県民の歌にも「岐阜は木の国、山の国」「岐阜は野の国、幸の国」「岐阜は詩の国、水の国」とある。この歌に全て含まれている。さらに、上下流、全国各地、そして世界につながる思いでわれわれは「清流の国ぎふ」づくりをやっているのだと、しっかりと胸に刻んで前に進んで行きたい。

清流の国ぎふ森林・環境税

緑豊かな清流の国ぎふづくり

岐阜県では「清流の国ぎふ」づくりが政策の柱として推進され、
清流の根幹をなしている森林などへの関心も高まっている。

森林・環境税を活用して、
森林整備など清流の国づくりに積極的にかかわる県内の人々や取り組みを紹介します。

INDEX

- Vol.1 環境保全林整備事業**5P
飛騨高山森林組合(高山市)
- Vol.2 里山林整備事業**6P
八木山自然の会(各務原市)
- Vol.3 流域清掃活動推進事業**7P
NPO法人いびがわみずみずエコステーション(揖斐郡揖斐川町)
- Vol.4 野生生物保護管理事業**8P
NPO法人メタセコイアの森の仲間たち(郡上市)
- Vol.5 里地生態系保全支援事業**9P
里山クラブ可児(可児市)
- Vol.6 ぎふの木育教材導入支援事業**10P
加納西保育園(岐阜市)
- Vol.7 県民協働による未利用材の搬出促進事業**11P
笠周地域木の駅実行委員会(恵那市)
- Vol.8 エコツーリズム促進事業**12P
NPO法人福寿の里自然倶楽部(恵那市)
- Vol.9 清流の国ぎふ地域活動支援事業**13P
ふれあい里山の会(岐阜市)

※本企画は、岐阜新聞朝刊で2013年8月8日から10月3日にかけてシリーズで掲載されたものです。

高山市 飛騨高山森林組合

環境保全林整備事業

持続的な未来のために



森林の持つ多面的機能など森林整備の大切さを語る
内木彦治組合長=高山市清見町三日町、飛騨高山森林組合

北アルプスをはじめとする多彩な山々を擁する高山市で、森づくりに携わる飛騨高山森林組合(本所同市清見町三日町)。県が昨年度導入した「清流の国ぎふ森林・環境税」を活用して、環境保全を目的とした水源林などの整備を進めている。

同組合は2005年6月、飛騨地域の八つの森林組合が広域合併をして発足した。現在組合員数は約7千人。高山市と大野郡白川村で、植栽や間伐、林道整備、雪害に遭った山林の復旧などに取り組んでいる。

高山市は、地域の90%超を山林が占め、過半の13万5千ヘクタールが民有林。スギやヒノキ、カラマツなどの人工林が広がり、同組合でも木材生産の整備に力を注いでいる。

治山機能アップ

森林・環境税を活用した環境保全林整備事業では、手入れのコストが高く保全活動が手薄になりがちな奥地や水源地の山林整備を推進している。材木として利用できない樹木の間伐などを行い、2012年度は約180ヘクタールで実施した。13年度は

スギやヒノキなど約133ヘクタールの整備を予定している。奥地での作業になるため、間伐材は運び出さず現地に残して土に返す方法で実施。広葉樹などの不用木を取り除く除伐なども行っている。山を手入れしてきれいにすることで保水力を高め、水源かん養機能の向上とともに、洪水の調整や土砂災害の防止など治山機能のアップも図っている。

環境保全林整備について内木彦治組合長(74)は「山、森、川、海はすべてつながっており、農業などの人間の営みもつながりの中にある。飛騨牛や野菜も豊かな自然がなければ育たない。大きな視点でみると、山は非常に大切であることが分かる」と強調し、森林の多面的機能の重要性について語る。

ただ、森林や清流を守る取り組みを進めるものの、高齢化による森林整備の担い手不足など林業を取り巻く環境は厳しい。それでも内木組合長は「林業に魅力を感じてくれている若者は多い」と話し、森づくりの技を受け継ぐ若者と、エコノミーとエコロジーの



間伐作業を進める飛騨高山森林組合の技術者=高山市清見町

共存できる森を、共に持続的に育んでいける仕組みづくりの大切さを説く。

多様性と安定性

「山林は少し手入れを怠ったからといってすぐに大きな影響を及ぼすわけではないが、山林の荒廃がもたらす影響は計り知れない」と内木組合長。豊かな山や海を次世代に引き継ぐためにも、多様性や安定性のある森づくりの重要性が高まっており、県内の森林では持続的な未来のための地道な取り組みが続けられている。

清流の国ぎふ森林・環境税を活用した事業の紹介【1】 環境保全林整備事業

～環境保全を目的とした水源林等の整備～

私たちの生活に不可欠な「清らかな水」を守るため、水源となる森林での間伐など、豊かな森づくりを進めています。間伐を行うことで、豊かな水を育む、洪水を和らげる、土砂崩れを防ぐなど、様々な力を高めます。また地球温暖化の防止や多様な生物を育むことにも貢献します。

(実施主体) 市町村、林業事業者等

整備計画(H24～H28) / 1万5千ヘクタール
H24の実施面積 / 1,633ヘクタール(24市町村)
H25の計画面積 / 3,000ヘクタール(29市町村)

「環境保全を目的とした水源林等の整備」では、この他、森林境界の明確化や、重要な水源林を守るための公有林化に関する事業にも取り組んでいます。

実施前



実施後



各務原市 八木山自然の会

里山林整備事業

美しい里山、次代に残す



「里山を適切に管理し自然に親しむ気持ちを子どもたちに伝えていきたい」と語る佐藤玄作会長=各務原市つつじが丘、八木山小学校

各務原市北東部の住宅団地の背後に広がる八木山(標高296メートル)と愛宕山(同269メートル)の環境保全と登山道整備に取り組み住民ボランティア団体「八木山自然の会」。佐藤玄作会長(72)「同市つつじが丘」は「住民の健康と心の潤いの場所としての里山を安全に美しく管理し、次の世代に残していきたい」と活動に励み、こうした身近な里山の維持にも県の「清流の国ぎふ森林・環境税」は生かされている。

同会は2003年、山の自然を維持管理するための住民ボランティア団体として発足。現在の会員は60〜80代の男女39人。活動は月に2回ほどで、登山道をパトロールして枝打ちや倒木の処理、案内板の設置、植樹、清掃活動などを行う。

児童と共に活動

同市つつじが丘の八木山小学校では、児童の古里への愛着を高めようと、春と秋に全児童を縦割りの2グループに分け、八木山と愛宕山に交互に登っており、会員が事前に安全点検し登山当日の児童のサポートも行う。

また、同校で行う自然観察などの総合学習「やぎやまタイム」にも協力し、山に入って児童に木の名前や野鳥について教える。10年ほど前から、山で松枯れやナラ枯れが目立ってきており、山で拾ったドングリから苗を育てて植樹し、山の再生を目指す活動も児童と進めている。



森林整備に向け各務原市の職員らと現地調査をする八木山自然の会の会員=2008年7月、各務原市の八木山

同事業は、5カ年で約800万円をかけ、八木山と愛宕山のふもとの森林約20ヘクタールを整備するもの。会員と市職員、業者が現地調査をした上で、除去する不要な木を決めて進めてきた。最終年となった12年度は、県の「清流の国ぎふ森林・環境税」のメニューにある、森林の多面的機能の回復を目指す「里山林整備事業」に採用され、事業

住民一丸で守る

市農政課では「林業だけでなく、地域の身近な里山の維持にも県の環境税は活用される」と成果を強調する。佐藤会長は「うっそうとしていた森は、日光が入りやすくなり、明るく生まれ変わった。美しくなった山を住民一丸で守っていききたい」と、今後の活動に向けて一層力をみなぎらせている。

費約160万円のうち半額が助成された。

清流の国ぎふ森林・環境税を活用した事業の紹介【2】

里山林整備事業

～里山林の整備・利用の促進～

野生鳥獣被害の軽減など地域住民の生活環境の向上や生物多様性の保全を図るため、里山林の整備を進めています。

《整備内容》

- 侵入竹の除去
- 森林病虫害の防除
- 広葉樹の植栽
- 修景等の整備
- 不用木の除去
- 既存施設の改修 等

(実施主体) 市町村、各種団体等
 整備計画面積(H24～H28)/2,000ヘクタール
 H24整備実績面積/281ヘクタール(17市町村) H25整備計画面積/400ヘクタール(26市町村)

事業の詳細は、県農林事務所又は市町村へお尋ねください。「里山林の整備・利用の促進」では、この他、県実施による環境保全モデル林の選定、整備に取り組んでいます。

修景整備



不用木除去



揖斐郡揖斐川町

NPO法人いびがわミズみずエコステーション

流域清掃活動推進事業

流域全体が運命共同体



河川環境保全への熱い思いを語る中村賀久理事長＝揖斐郡揖斐川町、岡島橋下流の揖斐川河川敷

「川は水が汚れて、ゴミがいつばい。河川敷で遊ばないように」。今から20年前、長女が通う小学校からの連絡に「清流の国の住人」は耳を疑った。「子どものころ皆、当たり前のように遊んだ揖斐川。地域の最大の魅力であり、誇りである清流を守らなければ」。

揖斐郡揖斐川町のNPO法人いびがわミズみずエコステーション理事長、中村賀久さん(58)が抱いた熱い思いは、町全域から近隣市町、西濃全域へと広がった。約3千人が心を一つに参加する住民活動「揖斐川流域クリーン作戦」。

「昔の自然を取り戻し、清流の町をアピールしたい」。まずは川に近づくことで住民の関心を高めようと「日本のどまんなか(いびがわ)ミズみずフェスタ実行委員会」を発足、ゴミ拾いしながら歩くウォーラリーや利き水大会などのイベントを毎年、開催した。

1993年、揖斐川町商工会青年部員でもあった中村さん。小学校PTAと青年部の同世代の仲間と行った町づくり勉強会の中でも「川と水」は重要なキーワードだと結論。

「同じだった思い」
当時は揖斐川支流の粕川や桂川が会場。参加人数は約2千人まで増えたが、7年を経過した2000年、転機を迎える。「流域は運命共同体。1町だけでなく、活動を揖斐川の上流から下流まで広げていこう」と、「揖斐川流域クリーン大作戦」と名称変更し、環境保全やまちづくり

意識変革を進める

05年に立ち上げた「いびNPO法人連絡協議会」で、体験講座「いび地域環境塾」を毎月開いている。

意識変革を進める

06年には西濃全域の「西濃環境NPOネットワーク」を立ち上げ、会長も務める中村さん。「活動目的は単なる清掃だけではない。住民の環境に対する意識変革こそが真の目的」と語る。「揖斐川町ではかなり住民意識が変わった自負がある。大勢の仲間とともに流域全体で意識変革を進め、美しい清流の国をつくりたい」。中村さんは20年前と比べ、見違えるほどきれいになった揖斐川を眺めながら思いを新たにしている。



約3000人が揖斐川流域で一斉に取り組むクリーン大作戦＝2012年5月、揖斐川町

清流の国ぎふ森林・環境税を活用した事業の紹介【3】

流域清掃活動推進事業

～生物多様性・水環境の保全～

清流は、流域の暮らしに様々な恵みをもたらし、豊かな海を育てています。一方、暮らしで生じた生活ゴミや流れ出した流木等が河川環境を悪化させ、海の環境や水産業等にも深刻な影響を与えています。こうした課題に対処するため、県下の主要河川流域において、流域の環境保全団体等による協働体と自治体等が連携し、流域全体に着目した河川清掃活動に取り組んでいます。

<平成25年度の対象流域>

●長良川流域(H24～) ●揖斐川流域(H24～) ●土岐川流域(H25～)

平成28年度までに5流域への拡大を目指しています。各流域の活動への参画をお待ちしています。



郡上市 NPO法人メタセコイアの森の仲間たち

野生生物保護管理事業

害獣から食肉市場創出

長良川の上流域に位置する郡上市。清流を育む母なる森林は、市の面積の約9割を占める。そんな森林の健全を保つのに欠かせない里山を守ろうと、害獣をもたらず野生生物を集落ぐるみで捕獲する体制づくりに奔走しているのが、同市のNPO法人「メタセコイアの森の仲間たち」。代表理事興膳健太さん(30)は「ずっと暮らし続けられる郡上をつくりたい」と目標を語る。メンバーの大半は30代前半。若者たちの熱い取り組みにも、県の「清流の国ぎふ森林・環境税」が活用されている。

シカやイノシシの肉で作ったジャーキーやソーセージを発売した。

自分たちだけで

一方で猟師となり、鮮明に見えてきたのは害獣に苦しむ農家の人たちの姿。「猟師も後継者不足に困っているけど、農作物の被害を受ける農家はもっと困っていた」。地域の悩みに正面から向き合い「農作物を」守り、野生動物を主体的に捕獲できる集落倍増計画」を打ち出した。計画は明快だ。猪鹿庁のメンバーが培ってきた捕獲のノウハウを集落の人たちに伝えながら、ともに野生動物を狩る。初期投資というハ

ドルをなくすため、おりやわなど必要な道具を極力無償で貸し出し、獲った後の処理も手間賃だけですぐに食べられる状態にまで加工して、住民たちの意欲を維持する。いち早く呼応したのはが郡上市八幡町の西和良地区の3集落。昨夏から支援を受ける洲河集落では若者たちの熱意に感化され、70代の2人が今月、狩猟免許を取得。自分たちだけで害獣を駆除していく意志を行動に示した。「自立支援を進める僕たちにとって顕著な成果」と興膳さん。「行政に頼ることなく、自分たちだけでもやっていけるといいう集落をもっと増やしたい」

野生動物の捕獲に乗り出したのは2009年。農業オベレーターとして働きながら農閑期の冬場に狩猟を生業(なりわい)とする人材の育成を——と、県が「田舎暮らしビジネス創出支援モデル事業」として支援したのがきっかけだった。イタインの若者2人とともに興膳さんも狩猟免許を取得。猟師が自活できる道を探り、10年冬には狩猟からジビエ(野鳥獣の食肉)を使った商品開発までを担う下部組織「猪鹿庁」を立ち上げた。



洲河集落の住民とともに仕掛けたおりの様子を確認する興膳さん(左)。「集落ぐるみでの活動が増えれば、自治力も養われるはず」=今年1月、郡上市八幡町西和良



興膳健太さん(前列中央)ら猪鹿庁の主要メンバー。活動理念に掲げるのは「里山と生きる」=郡上市大和町

愛着と夢を込め

非営利団体とはいえ、ボランティアではない。最低でも職員4人の人件費は賄わなければいけない。特製のおりこそ販売しているが、もうけは薄い。それでも支援に打ち込むには訳がある。「いつか野生動物を害獣ではなく、食肉として売れる資源へと変えたい。獲って肉を売り採算が合う」。市場を創出して初めて支援が完結するんだと思う」と興膳さん。彼らは特製のおりを「肉の畑」と名付ける。そこには郡上への心からの愛着と夢が込められている。

清流の国ぎふ森林・環境税を活用した事業の紹介【4】 野生生物保護管理事業

～生物多様性・水環境の保全～

野生生物による農林業や生活環境への被害の軽減及び生態系の保全や外来生物(アライグマ、ヌートリア等)による生態系への影響の防止を図るため、市町村がおこなう事業の経費を助成しています。

- ◆ニホンジカの個体数調整のための捕獲
- ◆特定外来生物捕獲用のオリ及び処理施設の購入
- ◆有害鳥獣捕獲従事者の育成 (実施主体)市町村

事業の詳細は、県庁自然環境保全課へお尋ねください。



郡上市内で捕獲されたニホンジカ(郡上市提供)

可児市

里山クラブ可児

里地生態系保全支援事業

里山再生モデル確立へ

可児市久々利の「我田の森」をフィールドに、間伐や植林、山道整備など人間と森林が共存できる里山作りに取り組んでいる「里山クラブ可児」。昨年からは県の「清流の国ぎふ森林・環境税」を活用し、耕作放棄された棚田で「田んぼビオトープ」プロジェクトを始動させた。鷺見鎮代表(69)「同市土田」は「子どものころに見た自然の風景を孫の世代に」と、熱い思いを胸に会員たちと精力的に作業に励む。

ビオトープ計画

ビオトープは、次世代に豊かな自然や生物の多様性を伝えようと、昨年からの4カ



「子どものころに見た自然の風景を孫の世代に」と里山保護活動に力を入れる鷺見鎮代表=可児市久々利

年計画で始めた。人の背丈を超す草が生い茂り、やぶ化していた約3千平方メートルの棚田の伐採作業から取り掛かり、水路や水源を調査。本年度は水路の護岸整備を実施している。

護岸には大人の手のひらほどの大きさの岩を丁寧敷き詰め、ステンレス製の網で覆う。小さな隙間を作り、水生生物の生息地を確保するためだ。手間のかかる地道な作業で会員らの額には大粒の汗が浮かんでいる。

来年度にはいよいよ水を引き入れて棚田の再生を図る。目指しているのは常時満水(たんすい)の池で、イトミミズ

を育てて無肥料、無農薬の稲作りをする予定だ。「もちろん、米作りが目的ではない。そこにはメダカやフナ、ヤゴ、トンボ、ホタル…それに、それらを餌とする鳥もいるだろう。その姿こそ、子どもたちに実感してもらいたい、市民の憩いの場」と語る。

守りつつ生かす

同クラブが保全活動を進めるこの「我田の森」は7月、活動実績が認められて県の「環境保全モデル林」にも選定された。この森で、関係団体らとともに里山再生手法の

モデルを確立させるため、会員たちは並々ならぬ意欲を見せている。

このプロジェクトのほかにもアカマツ林の整備や、市民向けの炭焼き体験、ジネンジョ掘りなど里山講座を実施し、里山に人を呼び込もうと努力を重ねる。「昔は人が自然資源を活用することで結果的に環境を守っていたが、今は人間が手を入れない」と鷺見代表。「守りながら、生かす」。そんな里山を取り戻したい。我田の森は今後、一層の活力が満ちてくるだろう。



耕作放棄された棚田で「田んぼビオトープ」作りに汗を流す会員=同

清流の国ぎふ森林・環境税を活用した事業の紹介【5】

里地生態系保全支援事業

～生物多様性・水環境の保全～

耕作放棄による農地の荒廃や外来種の侵入などにより近年崩れつつある里地(田んぼや水路、ため池など)の生態系の保全を図るため、モデル的な取り組みを進めています。

<平成24年度の取り組み>

(団体事業)実施団体:4団体 実施内容:希少生物の保護、ビオトープの整備など

(市町村事業)実施市町:各務原市、瑞穂市、笠松町、輪之内町

実施内容:スクミリンゴガイ(通称:ジャンボタニシ)の駆除12.6t

(県事業)実施内容:5箇所の農業用ため池でブラックバス等外来種の駆除6万匹

<平成25年度の取り組み> 5団体、6市町、農業用ため池5箇所を実施



希少生物(ウシモツゴ)の放流



外来種捕獲状況

岐阜市

加納西保育園

ぎふの木育教材導入支援事業

木材に触れ五感で遊ぶ



「自然を大事にできる心を育てたい」と語る伊藤洋子園長
—岐阜市加納神明町、加納西保育園

「先生、いい匂いがするね」。自分で磨いた積み木に鼻をくっつけて、子どもたちが無邪気に声を上げる。岐阜市加納神明町の加納西保育園で先月9日に行われた木育教室。県産材であるスギやヒノキ、カシなどを原材料にしたさまざまな形の積み木を、サンドペーパーで磨き、ワックス代わりに蜜ろうを塗る。園児らは作業を通じ、木の匂いや手触り、色、模様などの違いを感じた後、完成した積み木をプールに浮かべて、水上での積み木遊びを楽しんだ。

同園は、2010年4月に民営化。社会福祉法人和光会が運営して「木育」「食育」「知育」を3本柱に据え、体験を通じた学びに重点を置く。11年には、県の木と緑の学習推進事業のモデル園として、県木育推進員を講師に招いた木育教室を実施。それから2年間、独自の予算で積み木作りを続けてきた。

基金を積極活用

こうした木育の取り組みを充実させようと、昨年度からは森林・環境税を活用。昨年度は▽3歳未満のクラスの木製テーブルと椅子17脚を購入（ぎふの木で学校まるごと木製品導入事業）▽県産材を使ったおもちゃ2セットを購入（ぎふの木育教材導入支援事業）▽木のアクセサリー作り開催（森と木と水の環境教育推進事業）の三つのメニューで、基金を活用した。同園の伊藤洋子園長（64）は「幼少期に木材に触れることは非常に重要。五感を通じて覚えたことは、いつまでも体に染み込んでいるもの」と話す。

集中力と好奇心

伊藤園長は「県産材を使ったおもちゃなどは高価な物が多いが、子どもたちが県産材の木に触れる体験は大きな意味がある」とし、「木のぬくもりに触れることで、物の大



木の感触を楽しむ園児ら—岐阜市加納神明町、加納西保育園

中でも、基金を活用して購入した木のおもちゃは子どもたちに大人気。ヒノキやスギ、ブナなどさまざまな種類の木片を丸くした「まあるいつみき」は、年齢を問わず遊べるおもちゃだ。触ったり、匂いを嗅いだり、子どもたちはそれぞれに木の特性を楽しんでいる。

今年秋には木の実や枯れ葉を食材に見立てた、野外でのままごと遊びを計画しているほか、県産材を使った靴脱ぎ用の箱椅子の製作なども予定。伊藤園長は「木育の導入で、子どもたちに集中力と好奇心が身につけてきた」と成果を実感し、「子どもたちには、自然を大事にできる心、物を大事にする心を育みたい。木育を通じて、命の大切さを学んでもらえれば」と優しくほほ笑んだ。

清流の国ぎふ森林・環境税を活用した事業の紹介【6】

ぎふの木育教材導入支援事業

～公共施設等における県産材の利用促進～

子どもたちに、豊かな心を育む「ぎふ木育」の取り組みを進めるため、県内の教育福祉関連施設を対象にぎふの木を使った教材の導入を支援しています。

- 事業概要**
- (1) 対象事業者 市町村、学校法人、社会福祉法人、子育てNPO法人等
 - (2) 対象施設 幼稚園、保育園、小中学校、児童福祉施設等
 - (3) 対象教材 県産材で作られた「木のおもちゃ」「木製品キット」など
 - (4) 助成額 購入費用の1/2以内(1施設あたり10万円上限)

<平成24年度実績> 導入施設数/70施設 教材導入数/841セット



この他、教育福祉関連施設の木造化、内装木質化、学校の木の机・椅子等の導入を進めています。

恵那市 笠周地域木の駅実行委員会

県民協働による未利用材の搬出促進事業

間伐の輪、地域を活性化

山の間伐を通して、森だけでなく地域全体まで元気にしよう。

恵那市中野方町では、間伐活動が地域活性化に結びつく「木の駅」システムの定着化が進んでいる。同システムは、価格が安すぎて伐採がままならない木材(C材)を、県や市の補助金で上乗せした地域通貨「モリ券」で買い取る仕組み。県からの補助金には「清流の国ぎふ森林・環境税」が充てられている。山主の間伐意欲を刺激すると同時に、地元商店の活性化にもつながる「石二鳥の試みだ」。

地域通貨と交換

「休みの日にゴルフ行くよいうな気分だよ。チェーンソー使って、大きな木を狙い通りにズシーンと切り倒す。これがかもう気分爽快」

「笠周地域木の駅実行委員会」の鈴木今衛代表(64)は同町は間伐の面白さをそう話す。電気工事業を営む傍ら、暇をみて軽トラックで山へ向かう。気軽さが木の駅の売りだ。現在木の駅には近隣2町を合わせた計72世帯が

登録し、昨年度は27世帯が計389トンを山から運び出した。

2009年、高知県のNPO法人「土佐の森救援隊」をモデルに、恵那市のNPO法人「夕立山森林塾」の協力で発足。農家が野菜を道の駅で販売するように、間伐材も気軽に売ればとの願いを込めて「木の駅」と名付けられた。木の駅は持続的な間伐を

目指し、参加者の負担を極力軽減している。例えば、受け入れる丸太の長さは、軽トラックに載せやすい60〜210センチと幅を持たせ、重い生木のままの検量も認めている。集積場に集められた木材は、1トンあたり木材チップ価格3千円に補助金3千円が上乗せされ、計6千円分のモリ

券と交換。モリ券は町内のスーパーや理容店、ガソリンスタンドなど19店舗で商品券と同じように使える。

「1トン6千円。現金に換算すれば見合う仕事じゃない。それがモリ券だと不思議と得した気分になれる」と鈴木さん。「先祖代々の山をきれいにしたいという思いは誰にもある。モリ券がその一歩を踏み出すきっかけになった」と振り返る。

山主でなくとも間伐に参加できるのも、木の駅の特長。鈴木さんが代表を務めるボランティア団体「袖(そま)組」は、切り出した木材の引き取りを条件に間伐を無償で請け負う。山の保全に協力したいと各務原や中津川市から駆けつけるメンバーもいる。木の



「太い木を切り倒した時の気分は最高」と語る鈴木今衛代表=恵那市中野方町の間伐材集積場



間伐作業に汗を流す袖組のメンバー=昨年11月、恵那市中野方町

緑のダムで防災

間伐が行き届いた山は、大きく育った木が地中深く根を張り、土砂災害や洪水被害を防ぐ。鈴木さんは「個人の山という意識を捨てて、みんなを守る緑のダムにしなければならぬ」と力を込める。木の駅が4年間かけて切り出した間伐材は計約1200トン。それでも間伐が完了した山は全体の1%にも満たない。木の駅の果てしない挑戦は続く。

間伐が行き届いた山は、大きく育った木が地中深く根を張り、土砂災害や洪水被害を防ぐ。鈴木さんは「個人の山という意識を捨てて、みんなを守る緑のダムにしなければならぬ」と力を込める。木の駅が4年間かけて切り出した間伐材は計約1200トン。それでも間伐が完了した山は全体の1%にも満たない。木の駅の果てしない挑戦は続く。

清流の国ぎふ森林・環境税を活用した事業の紹介【7】

県民協働による未利用材の搬出促進事業

～公共施設等における県産材の利用促進～ (木質バイオマス利用関係)

間伐などにより伐採された樹木のうち、未利用のまま林地に残されている間伐材や木の枝などを、木質バイオマス資源として有効活用を図り、環境にやさしい低炭素・循環型社会の実現を目指すため、地域住民と市町村が一体となって取り組む未利用材の搬出事業を進めています。

平成24年度実績
実施箇所 / 4市町・5地域 (大垣市、揖斐川町、郡上市、恵那市)
搬出実績量 / 512.3t
平成25年度計画
実施箇所 / 4市町・7地域 (大垣市、揖斐川町、郡上市、恵那市)
搬出計画量 / 1,450t



この他、公共施設の木質ペレットボイラー、ペレットストーブ、薪ストーブ等の導入を進めています。

恵那市

NPO法人福寿の里自然倶楽部

エコツーリズム促進事業

まちに元気を取り戻す

「少子高齢化、過疎化の進む上矢作を元気にしたい」という思いを抱き、エコツーリズムに取り組みグループがある。

NPO法人福寿の里自然倶楽部(くらぶ)は恵那市上矢作町。町内の約10ヘクタールの原生林「アライダシ自然観察教育林」を案内して、豊かな緑を体感してもらっている。

同倶楽部は2011年4月に設立された。県の「清流の国ぎふ森林・環境税」などを活用し、多様なツアーを催す。

年々進む過疎化

事務局長の横光八州男さん(67)は幼少期を大分県宇佐市で過ごした。愛知県内の大学を卒業後、中学校の社会科教員として働く。初任地は上矢作町立上中学校(現恵那市立上矢作中学校)。町内の環境が横光さんにふるさとを思い起こさせた。「上矢作がこよなく好きになった」。定年退職後には恵那市観光協会上矢作支部の事務局長を務めていたが、まちが年々、元気を失っている気がしてならな

かった。実際に同町の人口は約2200人で、20年ほど前から約1千人減った。

「自然だけではどこにも負けない」横光さんののが自慢。町内で生まれ育った同倶楽部理事長の渡会三治さん(67)は住民と立ち上げた。

原生林を散策

恵那山地の一端に位置するアライダシ自然観察教育林で、年に10回ほどのエコツーリズムを開催する。冬季は道が凍結するため、開催期間は5月から11月(8月は休み)。倶楽

部の会員がネイチャーガイドを務め、約6時間をかけてトレッキングする。ブナやイヌシデ、カナクキノキ、モミなどの樹木が育ち、草花も茂る。異なる樹木が根元や幹の途中で一つになる共生木や、切り株や倒木の上に樹木が成長し、その樹木の根が地上に現れ

たままになる根上がり木なども観察できる。四季で表情を変える原生林は足を運ぶたびに発見があり「地元住民でも(アライダシ自然観察教育林を)知らない方が多く、皆さん驚いて帰られます」と横光さん。ツアーは「詳しく、

丁寧なガイド」と参加者の評判は高く、リピーターも増えている。

樹齢2500年といわれる弁慶杉(県指定天然記念物)、松並木(同)をめぐるトレッキングは女性に人気が高い。8月には小学生を対象にキャンプを開催。アライダシ自然観察教育林の散策や川遊びを思う存分楽しんだ子どもたちの夏の思い出づくりになっている。

「エコツアーを拡大し、大勢の人に参加してもらいたい」と渡会さん、横光さんは願う。設立から3年目。手探りの運営が続く。「まちに元気を取り戻す」という夢をかなえるため、倶楽部の挑戦は始まったばかりだ。



「エコツーリズムで地域を活性化したい」と語る理事長の渡会三治さん(左)と事務局長の横光八州男さん=恵那市上矢作町、NPO法人福寿の里自然倶楽部



約10ヘクタール原生林をめぐるツアー=恵那市上矢作町

清流の国ぎふ森林・環境税を活用した事業の紹介(8)

エコツーリズム促進事業

～地域が主体となった環境保全活動の促進～

岐阜県の豊かな自然を活かしたエコツアーを実施する団体等の商業的自立を促し、県内にエコツーリズムが普及・定着を図ることを目的として、市町村、団体等を対象にエコツーリズムに係る事業を支援しています。

- 事業概要**
- ①対象事業者 市町村、団体等
 - ②対象事業 エコツーリズムを推進するための活動
例:推進体制の整備、地域資源の調査、エコツアーの企画・ガイドの育成等
 - ③補助金の額 1団体あたり1,500千円上限
(補助率10/10以内)

- <平成24年度実績>
団体数(地域):4団体
(郡上市、白川町、下呂市、高山市)
- <平成25年度計画>
団体数(地域):5団体
(山県市、白川町、恵那市、下呂市、飛騨市)



事業の詳細は、県庁自然環境保全課へお尋ねください。

岐阜市 ふれあい里山の会

清流の国ぎふ地域活動支援事業

倒木から「共生」を再考

里山の懐に抱かれるように家々が立ち並ぶ岐阜市三田洞の住宅団地「小山台」。自然豊かな恵まれた環境の方で、手の入らなくなった里山の木が民家に倒れ、平穏な暮らしを脅かすことも。危機感を持った住民らが昨年11月、「ふれあい里山の会」を結成。県の「清流の国ぎふ森林・環境税」の補助金を活用し、住宅に隣接した樹木の伐採を皮切りにして自然との共生に動き出した。

住民にシヨック

「キツツキが木をつつく音が聞こえたり、夏は里山でヒメボタルが光ったり。リスもいるんですよ」と同会の渡邊優会長(64)＝同市三田洞東＝。「ながら川ふれあいの森」に近い里山「小山」に接する小山台は、自然に事欠かない。かつてはマツタケや竹細工用の竹を取るなど周囲の里山は身近な存在だったが、人が入らなくなつて住民の意識からも遠ざかった。問題になったのは、3年前の夏のことだ。民家の真裏の大木が突然

倒れ、2階を直撃。屋根を壊して部屋に枝が飛び込むなどの被害が出た。三原康允事務局長(78)＝同＝は「幸い空き家で人がはいなかったが、家は取り壊すことに。住民はシヨックを受けた」と振り返る。団地内に倒木の恐れのある同じような箇所は多い。住宅に覆いかぶさるように茂る木々にも住民は悩んでいた。落ち葉で樋が詰まったり、凍った雪が落ちて瓦が割れたり。雪の重みで竹が倒れてくることも珍しくない。

そこで、約30戸ある小山台の有志と周辺の住民で同会を結成。里山と雑木林の地権者に働き掛けを始め、いわゆる「支障木」の伐採の承諾をもらうため説明を重ねた。

木が育ち過ぎて地権者や住民が伐採するには危険が大きいため、作業は専門業者が行う。費用負担が大きな課題だったが、森林・環境税で賄えることから話が進んだ。別に市が実施した分と森林・環境税の補助分で、計6カ所の伐採や枝払いを11月末までに終えることができるようこぎ着けた。



9月の強風で新たに倒れた木。先端は民家まで数十センチの距離に迫っていた＝岐阜市三田洞

竹林に散策道を

懸案にめどがつき、同会は次年度に新しい目標を掲げる。住宅街にある薄暗い竹やぶに手を入れ、三田洞弘法につながる小道を京都・嵯峨野のような風情ある散策道に再生できないかと考えている。

切り出した竹を竹炭やパウダー状の肥料にするなど新たなアイデアも次々と浮かぶ。「若い女性や子どもが安心して通り、深呼吸したくなるような小道にしたい」と三原さん。渡邊会長も「倒木をきりかけに里山を考える集まり

ができた。いい地域にするため、活動を継続していきたい」と次の一歩を見据えている。



住宅地に近い雑木林を見回る「ふれあい里山の会」のメンバー＝岐阜市三田洞

清流の国ぎふ森林・環境税を活用した事業の紹介(9) 清流の国ぎふ地域活動支援事業

～地域が主体となった環境保全活動の促進～

森・川づくりへの関心と理解を深めていただくため、県民の皆さんがおこなう環境保全活動を支援しています。皆さんも清流の国ぎふの自然を守る活動に取り組んでみませんか!

事業概要

- ①対象事業者／県内に活動拠点を置く団体、法人
- ②対象事業／県民参画を促進する森・川づくり活動、水環境や生物多様性の保全活動等
- ③補助金額等／1事業あたり500千円以下(補助率10/10)、500千円を超える分(補助率1/2)

平成24年度実施団体数／31団体(参加人数／7,500人)
平成25年度実施団体数／36団体






お問い合わせ先

岐阜県林政部恵みの森づくり推進課

TEL.058-272-8472 FAX.058-278-2702 E-mail : c11513@pref.gifu.lg.jp

清流の国ぎふ森林・環境税のホームページ

清流の国ぎふ森林・環境税

検索

<http://www.pref.gifu.lg.jp/sangyo-koyo/ringyo-mokuzai-sangyo/kanren-joho/zei/>